

令和5年度「発掘速報展」開催



平城跡第 32 次調査 調査風景

令和5年度、いわき市内で本発掘調査4件、試掘・確認調査11件を実施しました。また、7遺跡8冊の発掘調査報告書を刊行しました。

本発掘調査のうち3件は平城跡です。磐城平城の^{たまちぐるわ}田町曲輪を対象とした第31・32次調査では、平安時代から明治時代の遺構・遺物を確認しました。磐城平城二ノ丸東側の堀跡を対象とした第34次調査では、陶磁器などが出土しました。他の1件は、国道6号勿来バイパス工事に伴う北作B遺跡の調査で、縄文・弥生・平安時代の遺構・遺物を確認しました。

試掘・確認調査は、道路改良工事や^{ほじょう}圃場整備等の事前調査として10遺跡11件を実施しました。四倉町の^{はじき}大野条里跡では、古墳時代の土師器や中世のかわらけが出土しました。



陶器の火鉢（瀬戸美濃産）

「令和5年度 発掘速報展」のポスターで紹介した陶器は、平城跡第31次調査で出土したものです。

江戸時代後半の火鉢で、胴部に動物の顔を模した把手が1対付けられています。

この火鉢の把手は、^{しし}獅子を象ったものと推定されます。

第31次調査は、いわき駅並木通り地区第一種市街地再開発事業地内の駐車場棟建設範囲 1,075㎡を対象に、令和5年4月から11月にかけて実施しました。

調査の結果、平安・戦国・江戸・明治時代の遺構を確認しました。明治時代の面では土坑と井戸跡・^{かわや}厠跡を確認し、幕末から明治時代の陶磁器が出土しました。



1. 漆器の椀



2. 方形の木製井戸側をもつ井戸跡



3. 柱材が残る柱穴



4. 瀬戸美濃産陶器の皿

江戸時代の面では、土坑・井戸跡・溝跡・柱穴・^{うね}畝状遺構を確認しました。土坑や溝跡からは、肥前・瀬戸美濃・大堀相馬等の陶磁器、かわらけ、瓦、漆器（写真1）・下駄・^{まげもの}曲物等の木製品、^{すずり}砥石・^{きせる}硯・石臼等の石製品、^{かんざし}煙管・^{さし}簪・刀装具等の金属製品、銭貨（寛永通宝）が出土しました。井戸跡は、方形の木製井戸側（写真2）をもつものと円形の木製井戸側をもつものの2種類がありました。これらの遺構は、^{たまちぐるわ}磐城平城田町曲輪に伴う侍屋敷に関連する遺構と考えられます。

戦国時代の面では、土坑・井戸跡・溝跡・焼土跡・柱穴（写真3）・畝状遺構を確認しました。溝跡は東西方向や南北方向に走り、平行あるいは直交することから、土地を区画するために設けられたものと想定されます。また、柱穴は柱材を残すものが多くみられ、^{さくれつ}柵列や掘立柱建物跡を構成していたと考えられます。遺構の内外からは、瀬戸美濃産の陶器（写真4）や中国製の^{はくじ}白磁・^{せいじ}青磁・^{そめつけじき}染付磁器、かわらけ、漆器・箸・下駄等の木製品、銭貨（宋銭・永樂通宝）、馬や小動物・魚骨等の動物遺体が出土しました。

平安時代の面からは水田跡を確認し、今回の調査範囲周辺が耕作域として利用されていたことがわかりました。また、遺構の内外からは少量の^{はじき}土師器・須恵器が出土しています。

平城跡（第24・25・31・32次）の調査では、江戸時代だけでなく、平安時代から明治時代までの遺構が重層的に確認されました。特に、磐城平城築城の時期より古い、戦国時代以前の遺構を確認したことが特筆されます。また、江戸時代の城郭の堀や侍屋敷、明治時代の郡役所などの遺構は、JR 東日本常磐線いわき駅周辺における街の成立や現在に至るまでの変遷を知る上で、欠かすことのできない非常に重要な発見となりました。

第32次調査は、いわき駅並木通り地区第一種市街地再開発事業地内の区画道路工事範囲 424㎡を対象に、令和5年5月から10月にかけて実施しました。

調査の結果、戦国・江戸・明治時代の遺構を確認しました。明治時代の面では、畑跡と磐城郡役所に伴うとみられる^{どうぎ}胴木を確認しました。江戸・戦国時代の面では、柱穴や土坑、溝跡を確認し、本調査区周辺には侍屋敷が広がっていたものと考えられます。

遺物は陶磁器・かわらけを中心に、下駄などの木製品や煙管などの金属製品、銭貨などが出土しています。

区画道路南側では、胴木を確認しました(写真1)。胴木とは、石垣や土塀の沈下を防ぐために、それらの基礎構造として設置された丸木のことを指します。本来はこの木の上に、石垣の石が据えられていたものと想定されます。これと同様のものが第19次調査でも確認されており、磐城郡役所の基礎として用いられていたと考えられます。

戦国時代の面では溝跡を確認しました(写真2)。区画道路南側のほぼ中央から検出され、調査区を東西方向に横断しています。隣接する第24次調査でも、同時期の溝跡が確認されており、今調査で確認された本遺構と強い関連があると考えられます。性格については、区画のために設けられた溝と想定されます。



1. 石垣基礎の胴木



2. 区画のための溝跡

第34次調査は、都市計画道路搔槌小路幕ノ内線(柳町工区)道路改良工事の予定範囲 310㎡を対象に、令和5年12月から令和6年2月にかけて実施しました。

調査の結果、磐城平城の堀跡を確認しました。堀跡は東側の立ち上がりを確認され、調査区を南北方向に縦断します。堀跡の^{うわば}上端から調査区西壁までの幅は最大で約3.5m、深さは約2.0mを測り、西側へ向かってさらに深くなるものと想定されます。絵図と照合すると、本堀跡は平城二ノ丸北東辺を区画していたものと考えられます。また、堀跡の堆積土からは明治時代以降の陶磁器が多量に出土しており、城の廃絶後も堀が開口していたことが考えられます。



調査区全景

(南から)

このほかの遺構として、土坑、溝跡、杭列、ピットを確認しました。いずれも検出状況や出土遺物から明治時代以降のもの判断されます。

きたさく
本発掘調査 北作B遺跡

北作B遺跡は、阿武隈高地から太平洋に向かって延びる小高い丘陵上に位置しています。国道6号勿来バイパスの延伸工事に伴い、令和5年11月から令和6年3月まで、発掘調査を実施しました。

今回の調査では、縄文早・前期、弥生、奈良・平安時代の竪穴建物跡や多量の須恵器を廃棄した土坑を確認しました。このことから、北作B遺跡の丘陵が、縄文時代から古代に至るまで、人々の生活の場として利用されていたことがわかりました。



調査区全景

(北から)

報告書刊行 平城跡 第16・17次調査

第16・17次調査は令和2年度、城跡公園の整備に伴い磐城平城の本丸跡で実施しました。御殿跡と推定される大規模な建物跡や池跡など庭園跡を確認しました。遺物は、大量の陶磁器・瓦とともに、かわらけ・焼塩壺などが出土しています。なかでも、肥前磁器の鍋島藩窯製品や中国磁器の出土は、本丸御殿の格式の高さがうかがえます。また、戊辰戦争に関する砲弾や銃弾も、落城の歴史を物語る貴重な資料です。

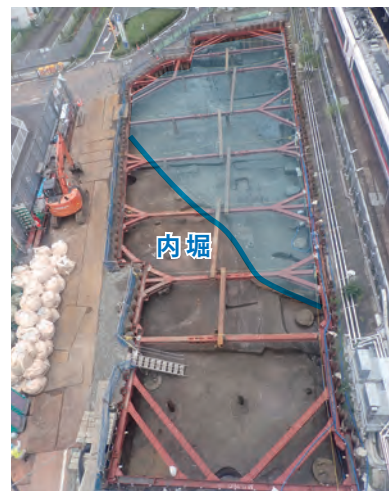


鍋島藩窯（後期鍋島）の磁器

報告書刊行 平城跡 第19次調査

第19次調査は令和3年度、いわき駅南口ホテル建設に伴い実施しました。中世から近代前半までの遺構が良好な状態で見つかりました。特に磐城平城の内堀跡は、内堀普請から廃絶までの状況が明らかとなり、江戸時代前半から幕末頃までの陶磁器・かわらけ・木製品などが出土しました。

また、明治時代前半頃の石垣基礎の胴木組遺構の構造や構築状況が明らかとなったことで、戊辰戦争後に内堀跡を埋めて石垣を据え、磐城郡役所などの公的施設が建てられたことがわかってきました。この地点における土地利用の状況が推察されます。



調査区全景

(東から)

